

平成 30 年度学生による授業評価にもとづく学長表彰

私の授業道具箱

医療栄養学科 熊取 厚志

四つの道具を紹介いたします。一つ目は、重要な語句を（ ）で抜いた文章と図や写真からなるプリントです。文章から認識する左脳と五感から認識する右脳の協働により理解を深めると共に書いて覚えさせるのがねらいですが、居眠り防止効果が絶大です。二つ目は、プリアクティブラーニングです。用語の意味などを学生同士でディスカッションさせた後、ランダムに指名して口頭で解答させます。「アウトプットした知識はなかなか消えない」という効果や共に学ぶ姿勢を養成する効果をねらっていますが、一番は「気分転換」です。三つ目は、毎回の復習テストです。前回との関連づけと、重要点を繰り返し書かせて長期記憶に向かわせる効果をねらっています。四つ目は、復習テスト+ α 問題集の自筆解答を定期試験前に提出させることです。これまでの内容を整理してアウトプットさせることより、理解と記憶を深める効果をねらっています。以上、ご参考までに。

学習者視点を基にした3つの方略

薬学科 郡山 恵樹

「学習者視点を基にした3つの方略」としてまとめた。方略1: 咀嚼のススメ。自分が説明しにくい点、学生に難易度が高い点について、イメージを多用し、かみ砕いた説明と例え話の提供を目指す。特に認知特性の観点から言語、聴覚、視覚情報の十分な提供を目指す。方略2: 俯瞰のススメ。常にその分野の全体像を把握し、ゴールの方向性を意識しながら細部の知識を学ぶことの重要性を伝える。方略3: Cinemeducation のススメ。映画や動画 (Cinema) を用いた医学教育 (Medical Education) を取り入れる。薬学は薬という「モノ」から入りがちな学問であり、「病気を知って患者を知らない」面がある。そこでせめて仮想的に映画・動画・本などの情報から患者を学ばせ、患者の病態、心理、苦痛に対する興味向上や意識づけを行っている。

年々学ぶ量が多くなり、習得スピードの加速が要求される時代である。引き続き、学習者視点を忘れずに、より効率良い知識・情報の提供を考え続けたい。

心理学を講義する

医療福祉学科 上原 俊介

平成 29 年度に公認心理師が国家資格化されて以降、心理学分野でも国家試験対策を意識した講義が求められるようになってきました。しかし、資格問題が先行すると、面白い心理学、つまり「人間学」としての心理学が先細りとなり、人生を生きるのに必要な心理学の教育が疎かになってしまうことも懸念されます。そこで私は、毎回講義の冒頭において、普段あまり意識しない自分の心がいかに洗練されたシステムをもっているかを学生に「体感」させています（たとえば、文化と心についての授業では、事前に提示した魚の入った水槽の絵を後で想起させると、学生は背景の環境全体の様子ばかりを詳しく描写しますが、それは日本の文化圏で育った人は森を見て木を見ずという包括的認知を形成しやすくなるからだと説明します）。また、心理学とは個人の直感や経験で語られるものではなく、科学的手法を用いたエビデンス・ベースの学問であることを伝えるために、授業構成では「現象（事例）の分析→現象を理解するための理論モデルの提示→理論モデルを実証した研究の紹介」という 3 ステップを踏むことを心がけています。もちろん、こうした工夫がどこまで教育効果をもつかは分かりませんが、せめて心理学の純粋な「面白さ」を伝えることができるようにはしたいと思っています。